

明治初期の佐伯教育 (下)

賛助会員 山内武麒

「依伯学校に、南海中学が今の高等科を見た様に置かれた事は、前にも書いたが、明治十九年に、中学校令に抵触すると云ふので廢校となつた。其代り翌二十年に、南海中学の跡に南海郡郡高等小学校と云うのが出来たのである。」

明治十九年(一八八六年)に、中学校令が改正されて、郡立也 町村立の中学校はことごとく廢止され、県立の一校となつてしまつた。大分県では、大分町の荷揚に設けられた大分県尋常中学校のただ一校だけとなつてしまつた。これから後、中学校に進学しようとするものは、「笈を負うて遊学する」以外になく、ごくわずかの人が進学出来なかつた。明治二十五年八月発行の『鶴谷叢志』第四号の通信欄に、「山名驥氏は本年七月大分県尋常中学校を卒業せり。因に云ふ我郡の学生にて同校を卒業したるは氏を以て初とす。」と云ふ語句が記されている。中学校進学は容易なことではなかつた。

明治十九年公布の小学校令によつて、小学校は尋常小学校と高等小学校の二段階に分れて、各々四ヶ年とした。高等小学校は郡立の一校とし、旧南海中学校の校舎を譲り受けて、修繕を施し、郡立南海郡高等小学校と名づけて、二十年七月二日に開校した。

「校長には最初關休三氏、後に山中盛太郎、竹腰龜太郎の両氏が代り、廿三年九月に石田豊城氏が承継いで最後即ち三十年迄其の地位を變へなかつた。教師には、本田左右太、荒牧文吾、久代孝次郎、薬師寺ユキ、山崎千ヨの五名が任ぜられたが、其後、大林龜太郎、石田豊城、琴谷柳三、牧源太郎、永野豊馬、佐藤茂夫、薬師寺徹、中村岩太、山名驥、石川復治の諸氏、これが明治二十七年、日清戦争が始まる前迄の任命である。」
南海郡郡高等小学校が開校した時は、特の郡長斎藤利明氏が学務管理者となり、校長心得として郡書記關休三氏が兼務した。教職員はわずかに五名であつたが、郡内た一つの高等小学校で、これまでの南海中学校に代わる權威ある学校であつた。開校当初の生徒数は、男女合せて百名で、三学年は男十一名、女二名。二学年は男三十六名、女一名。一学年は男三十八名、女十二名であつたと記録にある。

この郡立の南海郡郡高等小学校が設立されることが決まると、常に郷土の教育に深い関心を持つておられた、旧藩主毛利高策子爵は、この学校の英諾科向上のため、毎月三十五圓ずつ向う五年間寄附する旨の中出でがあつた。生徒の授業料は、これらの援助があつたので、月額わずか十二圓であつたという。

明治二十一年二月、副校長心得は他郷へ振動したので、山中盛太郎氏が校長に任ぜられた。高等小学校初代の校長である。これまで小学校に校長と名のつく職はなかつた。この人が最初の校長先生である。

「この中、大林先生と云ふのは、生徒を愛し、授業時間には口笛を吹いてお神楽を舞ふ様々面白先生であつた。田中先生と云ふは、意地悪で始終生徒と喧嘩ばかりしてゐた。琴谷先生は号令が上手で、「氣を付け」

をかけられると、生徒は自然にすくばつたと云ふ。中村先生は数学が好きで、算術の説明に夢中になり、教壇からバタバタいって落ちたので有名であつた。」

このころの先生は、これに見られるように、気概があり、面白い先生が多かつたのである。

「廿二年三月に始めて第一回卒業生を出しているが、男六名、女二名、都合八名であつた。」

高等小学校の記録には、男子八名、女子二名、計十名と云つてゐる。

山中校長は五か月で辞任され、代つて臼杵の人竹腰龜太郎氏が校長に就任した。二十三年七月、竹腰校長は日田郡に転出し、第三代目の校長として、佐伯出身の石田豊城氏を迎えた。石田氏は、明治十五年佐伯出身者として、初めて大分師範学校小学高等師範科を卒業した人であつた。

「三回生が所謂名士の揃いで、特に日清戦争当時台湾で戦死した富沢健助氏也、今大坂で警官か何かあつてゐる藪道造氏と来ては、実に有名なものであつた。昔の事で目中和雖も狐がよく山から降りて来たものだが、恰度授業中、而かも学校の庭に降りて来たのだからたまらない。富沢、藪の連中は唯狐ばかりに氣をとられて、首を突き出すので教師から叱られる。」

その中授業がすんだ。連中ころがる様に教室を飛び出し、非常な勢いで取り囲んだので、狐先生狼狽して進路を失ひ、早速生捕りにされた。富沢、藪の連中喜ぶ事一通りでない。緩で四脚をくくり、天井にぶら下げて大得意、大満足、ところが藪の覚ゆん、青竹を提げ来り撃斃でもやる積りで、面と一声其の狐の胆天をたたいたのである。何か以てたまるべき、狐はそのまきキヤツと言つて往生してしまつた。」

いたずら坊主の集まりであつたらしい。それにしても山際の校庭に、日中から狐が出ていたとは、今昔に感じえない。

(四)

「其頃、有名な軽気球事件と云ふのがあつた。これは明治廿四年二月紀元節の前夜に、当時理科に最も興味を持ってゐた牧源太郎(塚磨先生とも云つてゐた)先生が發起で、可なり大きな軽気球を作つて揚げた事がある。」

高等小学校には、二十三年十一月、天皇皇后兩陛下の御真影を拝戴することとなり、全町あげてこれを奉迎した。越えて二十四年の一月に、教育に關する勅諭が下附され、重なる光榮に感激して、祝賀行事が企画され、その一つとして、この軽気球揚げが企てられたのである。

「最初は今のお鹿の井戸の側で揚げて見たが、風が強くて失敗に歸したので、其二回目は上の校庭で揚げる事になった。素より佐伯では稀有な快挙と云ふので、尋常小学校の方では、教師児童、業を休んで參觀に出掛け、上級生は教師を助けて水素ガスを取るやら、薪を燃してそのガスを氣囊に入れるやら大騒動である。

夫れから幸ひガスも氣囊に満ちて、軽気球は氣持よく騰れたので、口をしっかりと握つて糸を放すと、軽気球は見事にフワリフワリと昇騰して行つたのである。一同は見上げながら喝采して喜んだ。

然るに悲しいかな、軽気球は山から差出た樫の枝にかかると見る間に、パツと言つて破裂し、惡臭を放つて氣囊は下へ墜落してしまつた。即ち二回目も失敗に終つたのである。

三四目は大手前であつた。此時も多くの人を集めた

が、風が別段に強く、遂に此日も失敗に終つてしまつた。夫れが此の軽気球航空の件中止してしまつたのである。

當時次のような俗謡が流行した。

豚麿さん 豚麿さん そりや琴谷

永野苦勞の 軽気球

常々掲げても し冬代う

風の内山 吹きほいで

場がらぬ答だよ 石田もの

悉く其の當時の先生の性を詠み込んで、常さん(常々)まで入れてある。(備考)常さんは学校の小使。

作者は小林のお姫さんであつたと云ふ。

軽気球を揚げるとは奇抜な計画であつた。高等小学校の記録を見ると、二十一年の四月に、文部省から奨励品が下付されている。その主なものは、理科の実験用機械器具であつたというから、その時こんな大きな計画を立てたのであろう。成功していたら大変なものであつたであらう。

「三四生が四年の時、其時の一年は即ち六回生である。これが四年生から仕込まれたものと見えて、又も所謂名士揃いと来たからたまらない。そして四年の時、とうとうストライキを追つ始めるに至つた。

其の原因と云ふが兄二十条あつた。即ち一つは品行点が甚だ少い。片岡徳新郎氏や藤田連次郎氏如き五点位しかない。次に唱歌の点で女子に比べて遙に遜色があると云ふのが不平である。どうして女子に勝てない。それらの為には男子は甚だ損をするると云ふので、遂に全級控らひて、うの散の為めと称して休業し、尺間登山を試みたのである。すると学校の方でも容赦ならぬと云ふので、文部省の法令などを出し掛けて、

散々脂を抜いた上、その主魁者と目すべきものを罰席に置き、どうやらして兎に角落着目着いた。當時は中力の広い大きな帯を結ぶ事が流行していたが、中谷有隣氏の如き、小さい小指程な帯をしめて居るのもあつた。それに例の大塚雲夫、下川幽溪など云ふ連中が一方奇行をほしいままにしていたのをから推して知るべしだ。」

(乙)

「南海部郡高等小学校は、引續き七、八、九回生を出し、恰度明治三十年三月を以て組合を解くに至つたのである。三十年四月から、其後が佐伯高等小学校となり、蒲江、浦代、八幡、小倉等にも亦高等小学校が設立されるに至つた。」

南海部郡高等小学校は、明治二十五年に郡立から二十三年か所村組合立となつたが、さらに三十年(二八九七)三月には、佐伯町ほか二十二か村学校組合を解消して、南海部郡高等小学校を廢止した。そして、これが代つて五つの学校組合を作って、佐伯、堅田、直川、上畑、新聞の五つの高等小学校を設立した。蒲代と蒲江には尋常小学校に高等科を併置して、五月にいつせいの開校した。

佐伯高等小学校は、佐伯町立となつて、鶴岡、明治、木立、東中浦、西中浦、中野各村の依託を受けることになつたが、その後、佐伯、鶴岡の一町一村の組合立となり、さらにその後、佐伯、鶴岡、木立の一町二村の組合立となつた。

上畑高等小学校は小倉高等小学校と改名し、新聞高等小学校も後に彦陽高等小学校と校名を改めた。

佐伯高等小学校と成つた時の教職員は、石田豊城校長以下、中村岩太、矢田喜久太、林鼎一、柴田米三郎、山名驥、吉垣純、山崎千代の諸氏であつた。

佐伯高等小学校は生れたが、早速困つたことが起つた。それは校舎がないことであつた。南海郡郡高等小学校は郡の共同財産であつたので、廢校になると、この校地、校舎および教具一切を、売却し整理してしまつたのである。

佐伯町では、臨時評議會を招集して、高等小学校の校舎を新築し、教具を新調することを議決したが、はいるべき校舎がない。やむを得ず、尋常小学校の暑中休暇の間を借りて授業をし、その後、尋常小学校は正午で授業を打ち切り、午後零時半から四時十五分まで高等小学校の授業をする、二部授業をして、新しい校舎の出来る日を待たつた。

校舎はようやく三十二年五月に落成した。校地は、現在の佐伯小学校の城山寄り約半分のところ、平屋建校舎二棟と教員室のある一棟であつた。平屋の校舎は鍵女りに建てられ、校舎の内側に土間の廊下があつて、柱が幾本も立っていた。

「今日に比べて今昔の感に堪へぬのは運動会である。恰度單物から襦袢に移る頃で、其頃は紺の着物が、よく運動会用として作られたものだ。十人中三、三人が袴をはき、十人中一人位の割合で膝の高い旧式の独逸帽をかぶる。他はみんな帽子など春夏秋冬あられしない。それから白の辨当風呂敷を左肩から右臍にかけてかつたものだ。これは先生も同じ扮装であつた。場所は西野や土器屋の河原でやつたこともあるが、後には剣崎を切開いてやつた事もある。

さて運動会の当日になると、一列を作り旗を押立

て競技道具を持つて遠行運動と称して出掛ける。運動場に着いてから大きい石を取除けて繩を張り、それから盲目旗拾ひ、二人三脚などやる。それが今のようになシヤツ一枚でやるのでははない。着物を着て袴なりに、或は脚絆、草鞋なりにやる。甚だしいのは辨当を擔いなりになる。そこで一回位づつやつて、又列を作つて非常な疲れ方で帰つてくる有様であつた。

昔の運動会は、遠足を兼ねてやつたものだ。でも児童たちには一年中で一番うれしい行事の一つであつたのに違ひあるまい。

「運動遊戯としては野球があつた。琴谷先生が始めて教へたので、無論スグ迷であつた。例のお庫の校庭でやつたもので、山は打揚がるとアウトになるので、弱輩は何れも山に登つて繩の束白のを持っていた。それから石蹴り、陣取り、綱引き、この綱引きは負けても中々離さんので、よく山中の前から片岡の前辺までひこずられていた。」

野球が佐伯ではじめられたのは、恐らくこの高等小学校である。佐伯小学校の沿革誌を見ると、明治三十四年四月に、此の頃より課外運動として野球を始めたり。とあるが、これは尋常小学校の児童が、高等小学校の生徒たちのする野球を見て、まねごとをはじめたのである。

「体操は兵式と普通の二種があつたが、例の柔軟体操とか言つて無暗に力を入れ力一ぱいに股などを打つので、痛くて赤くなるのであつた。すると今のは力が入つていたと云ふので、教師生徒諸共に喜ぶと云ふ有様。或は養賢寺の前辺に連れて行つて球竿を銃の代りにして、『ニ歩前へ前へ、前を突け、くるつと廻つて後を突け』など言つて攻撃の真似などをしていた。」

高等小学校の記録を見ると、明治三十二年の一月、職員会議の結果、本校の男子生徒をもつて中隊を編成し、毎土曜日、校長若しくは首席訓導が指揮して教練を行なうことにした。また、通常予鐘、非常予鐘の打ち方を定めて、集合訓練を嚴格にすることをきめた。とある。

このころから軍國調のきざしが始まったのである。この唱歌は廿五年頃から正課となり、廿九年頃に今のオルガンが来たが、それ迄は手風琴で、今のオイ子ニの薬売の様な工合に弾いて、唱歌を教えていたのである。オルガンが始めて学校で使われるようになったのは、明治二十八、九年ごろらしい。それまでは手風琴の時代が相当長く、南海部郡高等小学校の開校当時は、普通の琴で伴奏していたという。

明治二十六年の一月の新年式から、県の訓令によって小学校祝日大祭日儀式順序にしたがつて挙式することになり、その時に歌う祝祭日の歌詞と楽譜が決まった。この式日唱歌が制定される前は、式日に「春日弥生」など歌わせていたとある。

唱歌は高等小学校ではじめられ、尋常小学校ではずつと後のことであつたという。唱歌が止科として入れられたころの唱歌は、「春日弥生」「霞か雲か」「白蓮」「白菊」などで、「奈良の都」に至つては、最高のものであつたといわれている。

「別に寄宿舎があつて何時も数十名の健男児が、夏は蚤に喰はれ、平釜にこぼつくこげの分配まで、頗る面白い生活があつたが畧す。以上これまでが今年から所謂靈堂として、母校の同窓会に出席する様になつた連中であるのだ。」

この物語に出る人は勿論、この伝説めいた話を知っている人は、今日ほとんどいないであろう。この書残され

左物語で、明治初期に於ける学校教育の状況を想像するより他にない。

(おわり) 編集者、うかつにも前号標題を「明治初期の学校教育」としました。それは誤りで、今号のようは「佐伯教育」でありました。ご訂正下さい。相す又ませんことをした。(洞柴)

研究

緒方姓について

会員 佐 藤 貫 一
(福岡市在住)

さきに帰郷したさい、所用があつて南海病院を訪れ、緒方係之院長にお会いした。そのとき話があつた。緒方氏の姓のことに変わり、緒方院長が佐賀県のご出身で、生家は四百石とりの旧鍋島藩士、葉隠れの士風をうけた家柄の人であることを知った。

そこで思い出したのが「緒方」の姓が、とくに豊後だけではなく、豊前、筑前、筑後、肥前、肥後、日向の七國にまたがつて分布しているという事実と、さらに惟承が配流されたという上野の沼田を軸にする、関東、東北地方にもあること、また佐伯氏の子孫という人々のなかに緒方氏を称する家(緒方洪庵一族)があることなどで、これらのほとんどが緒方惟承を祖としていることである。もつとも「おがた」氏のなかには尾形、緒形などと書く家もあるが、宇佐姓の尾形氏以外は、姻戚伝承に類する竜蛇説話を伝えており、大神燈緒方氏と同系に見られている。宇佐姓尾形氏というのは、宇佐八幡宮の神人で